

|         |   |        |      |  |
|---------|---|--------|------|--|
| 氏名(本籍)  | 吉 <sup>よし</sup> 田 <sup>だ</sup> 国 <sup>くに</sup> 光 <sup>みつ</sup> (大阪府)  |        |      |  |
| 学位の種類   | 博士(理学)  |        |      |  |
| 学位記番号   | 博甲第5899号  |        |      |  |
| 学位授与年月日 | 平成23年7月25日  |        |      |  |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当  |        |      |  |
| 審査研究科   | 生命環境科学研究科   |        |      |  |
| 学位論文題目  | <b>A Geographical Study of the Transfer of Farmland Rights in Terms of Social Relationships</b><br>(社会関係からみた農地移動に関する地理学的研究) |        |      |  |
| 主査      | 筑波大学教授  | 理学博士   | 田林明  |  |
| 副査      | 筑波大学教授  | 理学博士   | 手塚章  |  |
| 副査      | 筑波大学教授  | 理学博士   | 山下清海 |  |
| 副査      | 筑波大学教授  | Ph.D.  | 呉羽正昭 |  |
| 副査      | 筑波大学准教授   | 博士(理学) | 松井圭介 |  |

### 論文の内容の要旨

本研究は、農地を維持するために行われる農地移動のプロセスに、農家間のいかなる社会関係が関わるかを分析することから、農地移動が農業経営や農業集落にとってどのような役割を果たしているかを明らかにすることを目的とした。具体的には、農家間の社会関係の広がりや結びつき方に注目し、地縁関係をその空間的広がりから、血縁を親等数から、さらにその他の多様な社会関係についても、それぞれの性質に留意して分類して分析指標に用いた。研究対象地域における個別農家の農地移動を取り上げ、それぞれの農業経営において、農地移動が農地の維持にどのような役割を果たしてきたのかを考察した。研究対象地域として、日本で最も農業経営の大規模化が進んでいる北海道十勝平野と、小規模農業経営ながら1年を通じて集約的に農地が利用されている淡路島三原平野を取り上げた。

その結果、十勝平野では全ての農家が収益性の向上を図る目的で農地移動を行っていた。この際、取引される農地は集落内や同一地区のものが中心であった。各農家は経済的動機により農地を集積しているため、作業効率の点から空間的に狭い範囲に農地を集中させていることが必要で、集落内や同一地区といった社会関係による農地移動は、安定的な大規模農業経営を存続させるうえで重要な役割を果たしていた。他方、集落外に及ぶ農地移動は、大規模化を志向する農家が競合するなかで、経済的動機から展開していた。受手となる農家は経済取引に限定された関係を駆使し、集落外にわたって能動的に農地を集積していた。

三原平野の農地移動では、受手となる農家は収益性の向上を企図しておらず、非経済的側面が動機となっていた。これまでの離農の場合、「家産としての農地」や「集落の農地」を維持するために、血縁や近隣関係を有する農家間で農地移動が行われてきた。しかし、このような結びつきにある農家内で農地の受手を確保することが困難になってきた。そこで集落内の農地を維持していくために、労働力に余裕のある農家が、近隣関係や血縁を有していない地権者の農地を受動的に請け負わざるをえない状況になってきた。他方、集落外に及ぶ農地移動では兼業農家が受手となり、出手との結社縁や血縁といった社会関係を維持していくために農地を請負っていた。

以上のことから、十勝平野では、経済的動機ではあるものの近隣関係や同一集落などの社会関係が結果的に集落内の農地の維持に寄与し、経済取引に限定された社会関係が地区外に及ぶ農地の維持に寄与していた。三原平野では集落内に加え集落外に及ぶ農地移動も、同一地区や血縁、結社縁が根拠となっていた。同一集落という社会関係が、集落内の農地を維持する根拠となる一方で、集落よりも広い範囲の地縁や血縁、結社縁が集落外の農地を維持することに寄与していた。両地域を通じて、集落という単位が農地移動を展開させるうえで重要なものとなる一方で、地域条件の差異によって、集落よりも広い範囲の地縁や血縁、結社縁は、農地移動が展開する空間的範囲に異なる影響を与えていた。

## 審査の結果の要旨

現在、日本の農業や農村を維持するうえで、農地の有効的利用が重要な課題となっている。これまで農地の利用や維持については、農業地理学や村落地理学において盛んに取り上げられてきた。しかし、農地集積による農業経営の大規模化や、離農農家の農地の有効利用などがより切実な問題となり、その基盤にある農地移動の仕組みを理解することが重要になっている。本研究は、この課題に取り組んだもので、各農家が単なる経済財として扱えない農地の取引を、その背後に存在する各農家間の社会関係に着目して分析した。農地移動にはいずれの場合においても必ず農地の受手と出手があり、農地の受手と出手の関係を分析することで、農地移動を広い観点から考察することを可能とした意欲的な論文である。すなわち、農地移動を収益の増大などの経済的側面から分析するだけでなく、「家産としての農地の維持」といった非経済的側面も統合して解明し、農業地理学に新たな研究視座をもたらしたといえる。

フィールドワークによって丹念に集められた農地に関するデータは、個人資産に関わる内容であり、農地移動を取り上げる研究において、データ収集そのものが困難とされてきた点からも重要な成果といえる。周辺学問領域にも有用な手法となりうる研究の枠組みは、地理学の領域を超えて評価されうるものである。本研究はまた、離農や脱農化が進む日本において、その跡地利用といった課題に取り組んでいくうえでも、新しい展望をもたらすものである。

以上の理由により、本研究は筑波大学大学院生命環境科学研究科の博士論文（理学）として十分な価値をもつものと判断される。

平成23年6月9日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもとに論文の審査及び最終試験を行い、本論文について著者に説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。